

モモせん孔細菌病の枝への感染時期と各種無機銅剤の防除効果

福島県農業総合センター果樹研究所
平成17年度果樹試験場試験成績書
平成18年度農業総合センター試験成績概要

1 部門名

果樹 - モモ - 病害虫防除
分類コード 04-02-23000000

2 担当者

菅野英二・瀧田誠一郎

3 要旨

モモせん孔細菌病の春型枝病斑は前年秋期の感染により生じ、その時期の防除が重要であることが知られている。感染経路には新梢の落葉により生じる落葉痕及び皮目からの感染が考えられる。そこで、秋期の新梢において強制摘葉により生じる傷と感染との関係、また秋期に用いられる各種無機銅剤の強制摘葉条件下における防除効果を検討した。

- (1) 2004年9月29日に摘葉時期をかえて本病菌 *Xanthomonas campestris* pv. *pruni* を新梢に噴霧接種したところ、翌年の発病摘葉痕率は接種直前摘葉区が6.9%、接種1日前摘葉区が0.9%、接種4日前摘葉区および無摘葉区が0%であった。
- (2) 2005年9月22日から10月20日までに5回、摘葉直後の新梢に本病菌を噴霧接種したところ、翌年の発病摘葉痕率はいずれも10%程度であった。
- (3) 各種無機銅剤を2005年9月22日に散布し、その11、15及び20日後に摘葉直後の新梢に本病菌を噴霧接種したところ、コサイドDF 1,000倍は20日後、4-12式ボルドー液及びICボルドー412 30倍は15日後の接種まで、翌年の発病摘葉痕率の防除価があよそ70以上あり、防除効果が認められた。
- (4) 以上のことから、秋期の新梢において強制的な落葉があった場合、落葉痕からの感染は落葉からほぼ1日以内であれば成立し、9月下旬～10月中旬までは感染確率が高いと考えられた。また、このような感染条件に対して、各種無機銅剤の予防効果の持続期間は、4-12ボルドー液およびICボルドー412 30倍はおよそ15日間、コサイドDF 1,000倍はおよそ20日間と考えられた。

4 その他の資料等

なし